

1 作 物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 麦の踏圧(麦踏み)土入れ及び湿害対策</p>	<p>(今月の作業のポイント) 麦の踏圧(麦踏み)土入れ及び湿害対策 麦の中間追肥 麦の雑草防除</p> <p>H24年産麦は、播種期や播種後にまとまった降雨が何度かあったため、排水対策の不十分な圃場などでは、出芽や初期生育がやや悪くなっている。</p> <p>麦の踏圧は、主茎や早期分けつ茎の生育を一時的に抑制する徒長防止、有効茎の増加、さらに根の発育促進による耐寒性強化や黄化症軽減等の効果があり、高品質・安定生産のためには不可欠である。特に徒長気味の圃場では早めに踏圧作業を行う。出芽数が多い場合(出芽数が200本/m²以上)は、穂数が多くなり穀粒が小さくなるので、踏圧に加え、土入れの回数を多くして穂数をコントロールする。</p> <p>踏圧の作業は、踏圧ローラー等で、3～4葉期頃から茎立ち期までに2～4回、15～20日間隔で行う。土壌が湿っている状態での踏圧は、土が固くしまって根の発育を悪くするなど品質・収量に逆効果となるので、必ず土壌が乾いた状態で行う(写真1)。</p> <p>今の時期の土入れは、肥効の向上、茎数調節、雑草防除、土壌の乾燥防止や溝さらえによる湿害軽減効果がある。排水溝の整備が不十分な圃場では、排水溝の整備を兼ねて積極的に土入れする。また、明きょ(排水溝)は設置しているものの、その設置間隔が広い(4～5m以上)場合は湿害対策としては不十分なので、麦の生育している条を犠牲に</p> <div data-bbox="853 846 1385 1245" data-label="Image"> </div> <p>写真1 踏圧作業</p> <div data-bbox="922 1644 1385 2011" data-label="Image"> </div> <p>写真2 土入れ作業</p>

項 目	作 業 内 容
(2) 麦の中間追肥	<p>しても、その間に新たに排水溝を設置しながら土入れした方が良い。</p> <p>土入れの作業は跳ね上げローター付き管理機などを用いて、乾土を1 cm程度の厚さに、均一に覆土するように行う(写真2、3)。</p> <p>写真3 整備された明きよ</p> <p>中間追肥として10 当たり窒素成分でイチバンボシ、ヒノデハダカは1～2 kg、マンネンボシは2～2.5 kg程度を1月下旬までに施す。また、湿害の発生している圃場では窒素追肥は効果が高いので中間追肥を必ず施用する。1 m²当たりの苗立数が多い圃場(300本以上)では、窒素欠乏による黄化症が発生しやすいので、早めに追肥する。</p>
(3) 麦の雑草防除	<p>播種後に土壌処理剤を散布した圃場でも、播種直後に降雨や地下水位が高い圃場等で抑草効果の低下が見られ、多種の雑草が発生している圃場では、ハーモニー剤を茎葉処理する。苗立数・茎数が少ない圃場や湿害の発生している圃場では特に雑草が繁茂しやすいのでこの剤を必ず散布する。また、実需者から強く要望されているカラスノエンドウ種子の収穫麦への混入防止について、カラスノエンドウはハーモニー剤が効かないので、広葉雑草に効果のあるアクチノール剤を用いる(写真4)。</p> <p>なお、これらの除草剤は処理直後に低温に遭遇すると黄化や葉枯れ(寒害)を生じることがあるので、強い寒波が予想される時は寒さが収まってから処理する。</p> <p>また、カズノコグサなどの雑草は土壌水分が高いと発生しやすく、繁茂して麦の生育を阻害するので、排水対策を徹底する。</p>



写真4 麦畑のカラスノエンドウ

(作成 農林水産研究所)